

史跡 平出遺跡

昭和60年度県営かんがい排水事業中信平地区
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1986

塩尻市教育委員会

序

平出遺跡は昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての幾多の貴重な資料が発見され、昭和27年3月には国の史跡に指定された重要史跡であります。この度この史跡地区を含む桔梗ヶ原地区を対象として県営畑地帯総合土地改良事業が計画され、史跡への影響も重大であることから県教育委員会、文化庁の指導のもとに事業実施地区の事前発掘調査を行うことになりました。発掘調査は花村格先生を団長にお願いし、11月29日から12月7日にかけて行われました。この間団長はじめ参加者の方々には初冬の寒さの中で献身的な御尽力を賜りました。また、今回の調査が初期の目的を達し、無事終了できましたことは県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会の平林実己実行委員長以下役員の方々、平出区長上野広市氏および平出遺跡会長市川琢磨氏等地権者の方々の深い御理解と御援助によるものであります。ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和61年3月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優 一

— 例 言 —

1. 本書は塩尻市教育委員会が長野県中信土地改良事業所より委託を受けた昭和60年度県営かんがい排水事業中信平地区に伴う史跡平出遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、平出遺跡発掘調査団（団長 花村格）に委託し、現場での調査は昭和60年11月29日から12月7日まで実施した。
3. 遺物および記録文の整理作業、報告書作製は平出遺跡考古博物館において昭和60年12月から昭和61年3月まで行った。
4. 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

目 次

第 I 章 調査経過	1
第 1 節 調査にいたる経過	1
第 2 節 調査体制	2
第 3 節 調査日誌	3
第 4 節 遺跡の状況と面積	4
第 II 章 調査概要	5
第 1 節 発掘調査場所	5
第 2 節 調査概要	6
第 3 節 遺構と遺物	11
第 III 章 まとめ	17

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査にいたる経過

昭和38年から開始された県営畑地帯総合土地改良事業は、順次工事が進められ昭和47年からは塩尻市地域がその対象地区となり、さらに桔梗ヶ原地区も昭和60年に事業認定され、具体的な工事が進められることとなった。この事業地域内に、国史跡平出遺跡が含まれていたことから塩尻市教育委員会は事業主体の長野県中信土地改良事務所と再三にわたり協議を重ね、遺跡への影響を最小限にとどめるように当初計画の手直しを行った。これに基づき昭和60年7月29日 長野県教育委員会を通じて、現状変更許可申請書を文化庁に提出した。11月2日文化庁「史跡平出遺跡よりの現状変更（かんがい施設布設）について」の通知があり、「申請地は地下遺構の存在が予測されるところでありますので、事前に発掘調査を行い、その結果を待って処理することが適当であると考えます。」と事前に発掘調査を行いその結果を待って処理する旨の通知があった。

このため、塩尻市教育委員会は長野県中信土地改良事務所と協議し、昭和60年、61年度の2ヶ年度に事前発掘調査を実施することとし、昭和60年度はかんがい排水事業部分の調査を行った。発掘調査は11月29日から12月7日に行なった。

発掘調査計画書 （一部記載）

1. 発掘調査地 塩尻市大字宗賀平出
2. 遺跡名 平出遺跡
3. 発掘調査の目的及び概要 開発事業県営かんがい排水事業(乾水部)に先立ち648m²を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和60年12月15日までに終了する。調査報告書は昭和61年3月31日までに刊行するものとする。
4. 調査の作業日数 発掘作業15日 整理作業15日 合計30日
5. 調査に要する費用3,000,000円
7. 調査報告書作製部数 300 部

第2節 調査体制

団 長 花村 格 (塩尻市文化財調査委員)

調 査 員 小林 康男 (日本考古学協会、市教委)

鳥羽 嘉彦 (長野県考古学会、市教委)

伊東 直登 (" ")

調査補助員 前田 清彦 (信州大学学生) 林 佳孝 (日本大学学生)

参 加 者 内川幸次郎、内川なほ江、右城たか子、大塚朝野、加納仙三郎、加納宣子、川上菊子、川上しず江、川上比奈子、川上 豊、北沢勝利、小松重久、小松鈴子、小松三枝子、小松幸美、小松義丸、塩原しず子、清水年男、白木正富、曾根原正子、武居千津子、田島泰代、中野やすみ、林正千代、林みつ江、牧野嘉津子、村山明、柳沢千寿子、由上はるみ、米山米三郎、青木千秋、青木秀夫、浅井清、芦沢六子、足助よし子、太田多美子、小沢博光、葛西一義、上條宮男、上條留次、小出兼義、郷戸正次、武居九市、辰野みどり、中垣内秋人、中村 啓、中村ちか子、松沢高江、丸山とし子、山崎千斌、上野廣市、中野永雄、古厩馨子、中村ふき子、山本敬子、太田正子、金田和子、柳沢千寿子

事 務 局

塩尻市教育委員会教育長	小松 優一
市教委総合文化センター所長	二木 三郎
〃 文化教養担当課長	清水 良次
〃 文化教養担当次長	原田 博
〃 文化教養担当主事	鳥羽 嘉彦
〃	伊東 直登
〃 平出遺跡考古博物館学芸員	小林 康男

協 力 者

県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会	平林 実巳
〃	副委員長・工区長 市川 得二
〃	工区長・畑かん部会長 川上 徳治
〃	工区長・農道部会長 中野 弘樹
〃	工区長・用地補償部会長 平林 金男
〃	畑かん部会副部会長 平林 達郎
〃	農道部会副部会長 塩原 勝仁
〃	用地補償部会副部会長 川上 豊
〃	畑かん部員 大野田恒治
〃	〃 市川 信利

〃	〃	川上 金吾
〃	農道部会員	平林 秀一
〃	〃	大野田四郎
〃	〃	平林 正雄
〃	用地補償部員	塩原 良美
〃	〃	平林 一夫
〃	〃	上野 広市

地権者 中野元広、市川琢磨、中野有美、大野田弘行、中野正人、川上 囊、中野三郎四郎
 洞沢幸一、田島幸子、武居武雄、清水賢次

第3節 調査日誌

昭和60年11月29日(金)晴後曇 花村調査団長による発会式の挨拶、小林調査担当より経過報告、留意事項の説明の後、作業に入る。テントの組立て、器材整備を行う一方、耕地林務課担当者武居主任立合いのもとに発掘区域を確認する。発掘区域東端(西端を基準とし、200m付近)から掘り下げを開始する。道路下であるが、比較的軟かく作業は順調に進捗する。土器片少量出土。

11月30日(土)晴後曇 掘り下げを継続する。昨日土器片が出土した箇所は、精査の結果、落ち込みが確認され、住居址の可能性が強くなった。

12月2日(日)曇後時々小雨 朝小雨模様であったため作業人員がやや少ない。発掘区域を40m付近までのぼす。200~40mまでの区間の掘り下げほぼ終了。遺物の出土は極めて少ない。一部セクション図作成。

12月3日(火)晴 朝冷え込みが厳しく、発掘区域全面に霜柱がひどいため掘り下げ作業に入るに先立って霜柱を除去する。240~260m、0~40mの掘り下げ、セクション図作成、写真撮影。調査が終了した120~160mは埋めもどしを行う。

12月4日(水)晴後時々小雨 住居跡(J-1)の掘り込み面を確認し、覆土を除去する。住居址の規模を明確にするため南・北に拡張区を設け、掘り下げを行う。床より浮いて土器が出土する。平出III Aの土器片が目立つ。このほかに、東地区(280~349m)の掘り下げを行う。

12月5日(木)晴 200~349mのセクション図作成、写真撮影。住居址の遺物取り上げ、平面図作成。埋めもどし。掘り下げ作業は本日でほぼ終了。

12月6日(金)薄曇 埋めもどし作業を行う。

12月7日(土)曇後晴 昨日の残りの埋めもどし、調査区全域の平面図作成。器材整理、撤収。

整理作業は12月~3月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺跡の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理、製図、図版作成を行う。報告書の原稿執筆も併行して実施する。

第 4 節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場 所	現 況	種 類	最低調査 予定面積	調査面積	発掘経費
平 出	塩尻市大字 宗賀平出	道 路 水田・畑	集落址	648 m ²	698 m ²	3,000,000円

発掘調査経過表

内 容	月	工 程 表			検 出 遺 構	主 な 出 土 遺 物
		11	12	1～3		
発 掘	掘 理	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 15px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 15px; margin: 5px;"></div> </div>			縄文時代 中期住居 (J-1)	縄文中期土器 石 器
工 期	着 手	昭和60年11月29日				
	完 了	昭和61年 3 月25日				

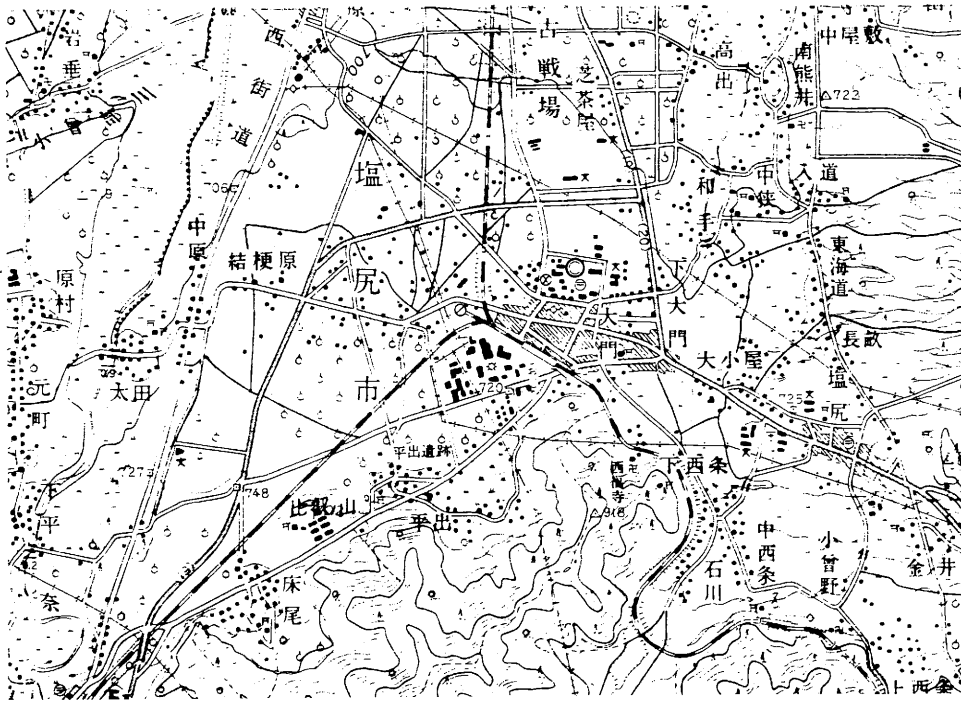
第II章 調査概要

第1節 発掘調査場所

平出遺跡は、塩尻市大字宗賀平出に所在する(第1図)。15haにおよぶ史跡指定地の中で今回の調査区域は北端部に位置し、昭和57年度より環境整備事業が進められている史跡公園の東側にあたる(第2図)。海拔は732~727mで、東に向かった微傾斜地である。

平出の泉は南西方面へ200mの距離にあり、これより流出し現平出の集落中を貫流する渋川は12m南にある。

今回調査した区域に隣接する畑地の一部は、昭和54年、55年度に遺構確認調査が実施されている。すでに「史跡平出遺跡遺構確認調査報告書 — 昭和54年度 —」「同 — 昭和55年度」が刊行されているので、遺構、遺物の分布状態からみた遺跡の広がり把握する資料となろう。



第1図 平出遺跡位置図 (1:50,000)

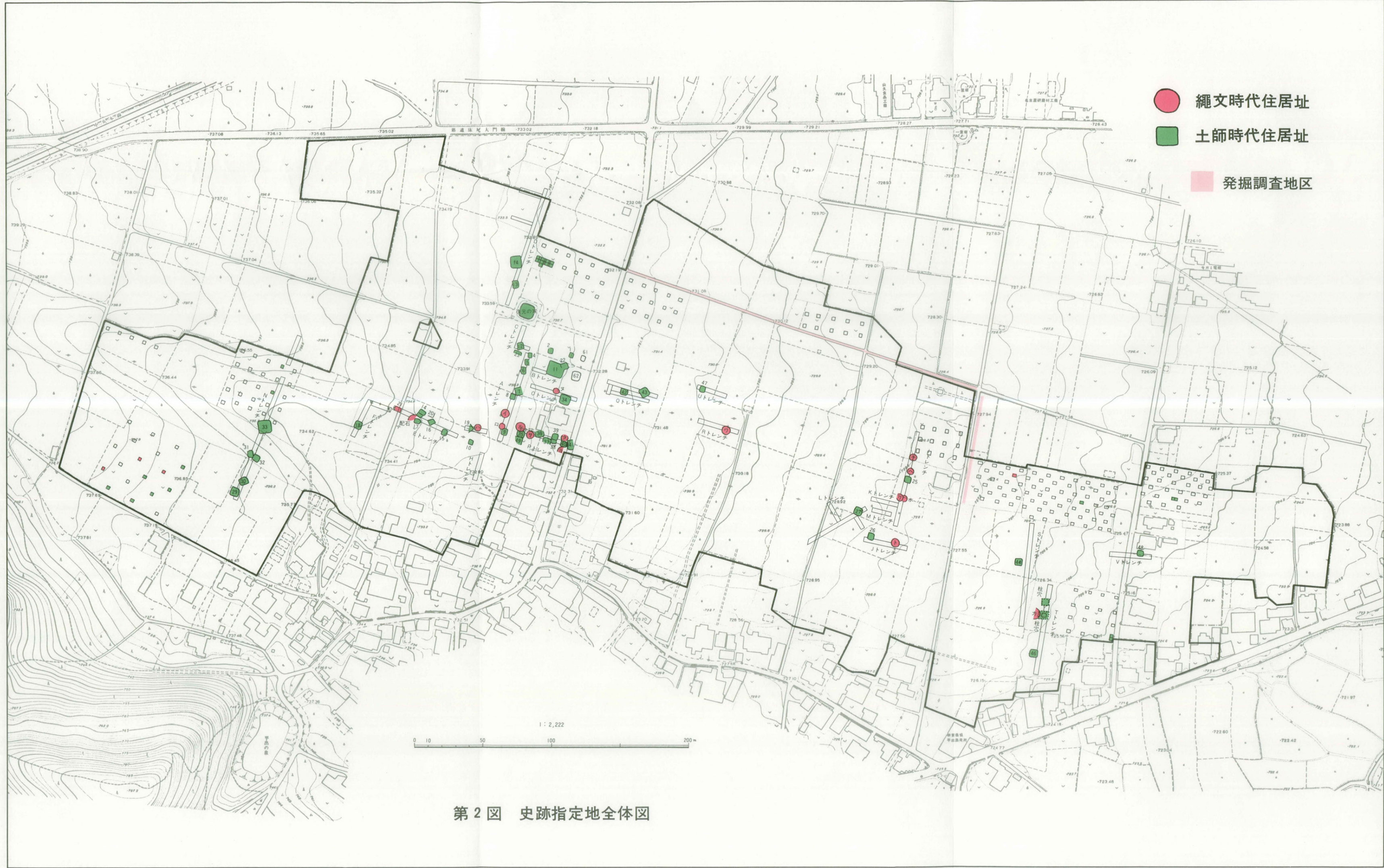
第2節 調査概要

今回の発掘調査は、県営かんがい排水事業幹線部布設箇所、幅員2m、延長349m、698m²にわたって実施された。調査区域は、便宜的に最西端を基点とし、これよりの距離によって位置を示すことにする。

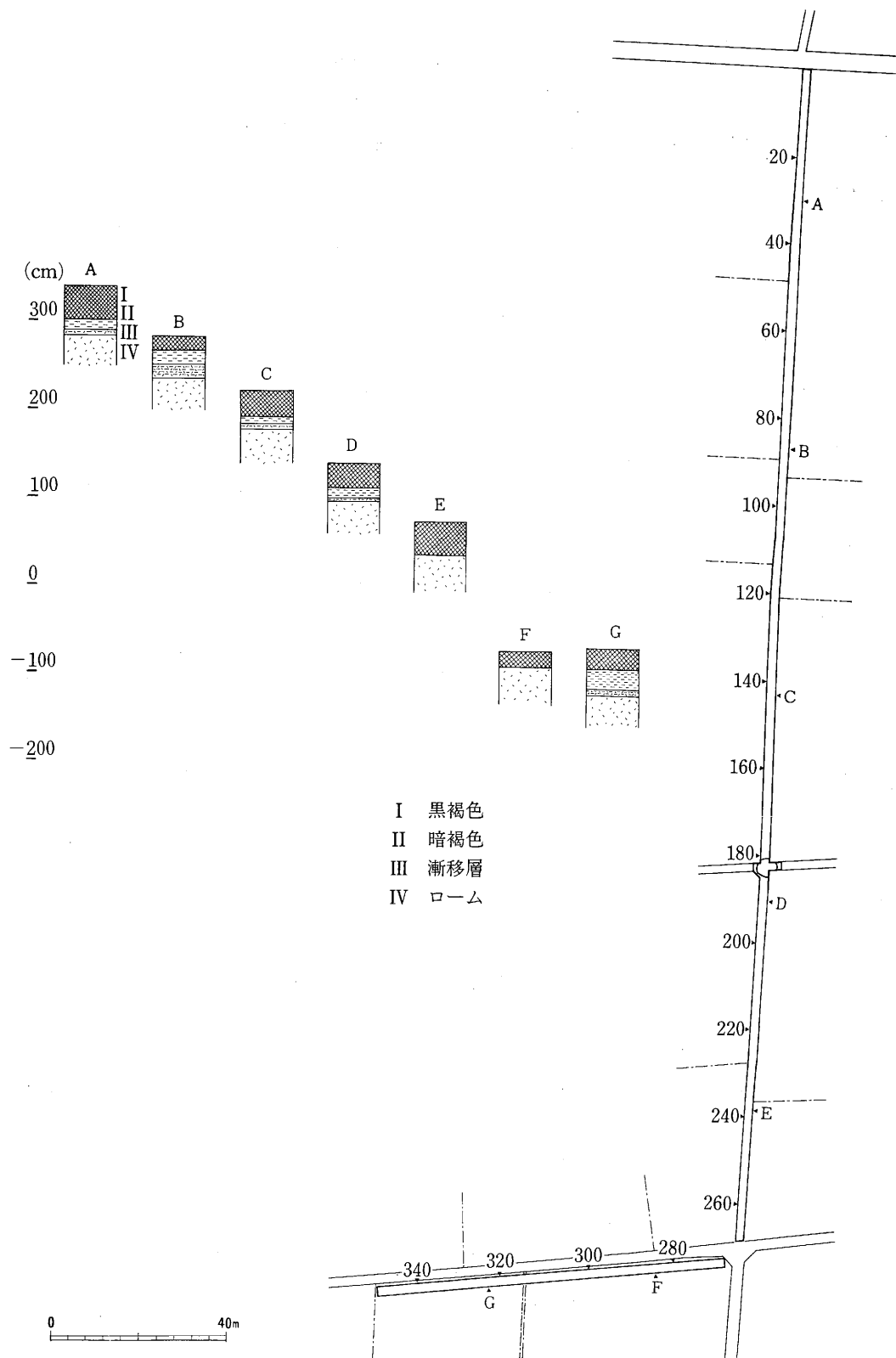
検出された遺構は縄文時子中期の住居址(J-1と呼称)が1軒のみである。出土遺物は住居址覆土を中心とした縄文中期土器がややまとまった資料であったほかには、少量の縄文中期土器片、打製石斧、凹石、黒曜石片が得られたにすぎない。出土地点、遺物の種別などの詳細は第1表を参照して頂きたい。以下、調査結果の概要を記す。

- | | |
|----------|--|
| 0～20m | ローム層まで浅く、5m付近までは攪乱が著しい。縄文土器小片1が出土。 |
| 20～40m | ローム層まで40cmとややとやや厚みを増す。幅35cmの後世の攪乱のための溝が見られる。 |
| 40～60m | ローム層までが浅くなり、溝の続きが見られる。 |
| 60～80m | 地層の状態は、40～60mと同様であるが、ブドウの根が入り込んで来ている。 |
| 80～100m | ローム層まで35cm前後と浅い。縄文中期土器片が少量出土。いずれも小片で、流れ込みの可能性が強い。 |
| 100～120m | ローム層まで厚くなり、縄文中期土器片、打製石斧が出土。 |
| 120～140m | 130m付近で凹石、土器片出土。 |
| 140～160m | ローム層まで浅く安定した状態。 |
| 180～200m | ローム面までの攪乱が著しい。191mで縄文中期に属する住居址が検出された。覆土中に土器がややまとまって出土した。住居プラン以外からの遺物は認められなかった。 |
| 200～240m | 前の地区と同様に攪乱が著しい。遺物の出土は全くない。 |
| 240～260m | 墓地と水田にはさまれた地区で、ローム面直上まで攪乱が著しい。その攪乱もローム面には殆んど影響が認められないが、遺構の遺存はみられない。 |
| 260～280m | この地区からは水田であり、開田時、表土の削平を行っているためにローム層まで10cmと極めて薄い。 |
| 280～300m | 耕土が15～20cmで、その真下がローム混じりの褐色土となり、攪乱が著しい。 |
| 300～320m | 水田の耕土20～30cmとやや厚くなる。縄文中期土器片3が出土。 |
| 320～349m | 畑地となり、耕作土、褐色土、ローム層と安定した状態となり、ローム層まで50cmと深くなる。遺物の出土はない。 |

以上のように、今回の調査区域は、全体的にローム層まで浅く、遺物の出土も極めて少ない結果となった。



第2図 史跡指定地全体図



第3図 発掘調査区全体図

第1表 出土遺物一覧表

種類 地点	土 器					石 器				総 計	備 考
	縄文	土師	灰軸	その他	計	打斧	凹石	黒曜石	計		
0-20	1				1					1	
20-40											
40-60											
60-80											
80-100	3				3					3	
100-120	1				1	1			1	2	
120-140	24	1	2	3	30	1	1	3	5	35	
140-160				1	1		1		1	2	
160-180											
180-200	201				201			3	3	204	J-1号住居
200-220											
220-240											
240-260											
260-280											
280-300											
300-320	2									2	
320-340						1			1	1	
計	232	1	2	4	239	3	2	6	11	250	

第3節 遺構と遺物

(1) J-1号住居址(第4図)

遺構 191m地点の掘下げを行っていたところ、ややまとまって土器の出土があり、これを中心として暗褐色土の落ち込みが認められた。そこで暗褐色土を除去したところ住居の床が現われ、壁も遺在状態良好に検出された。住居の規模を究明すべく南北に拡張を行い、完掘を目指したが、ブドウ棚の支柱が埋設されており、一部未掘のままとなった。しかし、住居の主要範囲は調査できたためその規模、性格は明らかにすることができた。

プランは、東西5.30m、南北5.15mのほぼ円形を呈する。埋土は、II層、暗褐色土層、IV層、炭化物を混入した暗褐色土で、IV層は攪乱の可能性が高い。壁は良好な状態で検出され、東壁12cm、北壁20cm、西壁22cm、南壁16cmの壁高を測る。掘り込みは北壁を除き、きつくなされている。床面は、堅く踏み固められ、起伏もなく平坦である。床面からは、柱穴と考えられるP1~P5のピットが検出された(P₁29×29、-50、P₂34×35、-40、P₃31×33、-42、P₄28×30-47、P₅31×32-46)。この5ヶ所のピットのほかに、北東隅の未掘部分にも1ヶ所のピットがあるものと推定でき、おそらく6本主柱であったものと考えられる。炉址はなく、焼土の痕跡も検出されなかった。未掘部分は、壁周辺のみであるので、この部分に炉址のあった可能性は薄く、結局この住居には炉が設けられなかったものと考えられる。周溝の痕跡も認められなかった。

遺物 本址からは土器と石器の出土があった。量的には極めて僅少である。

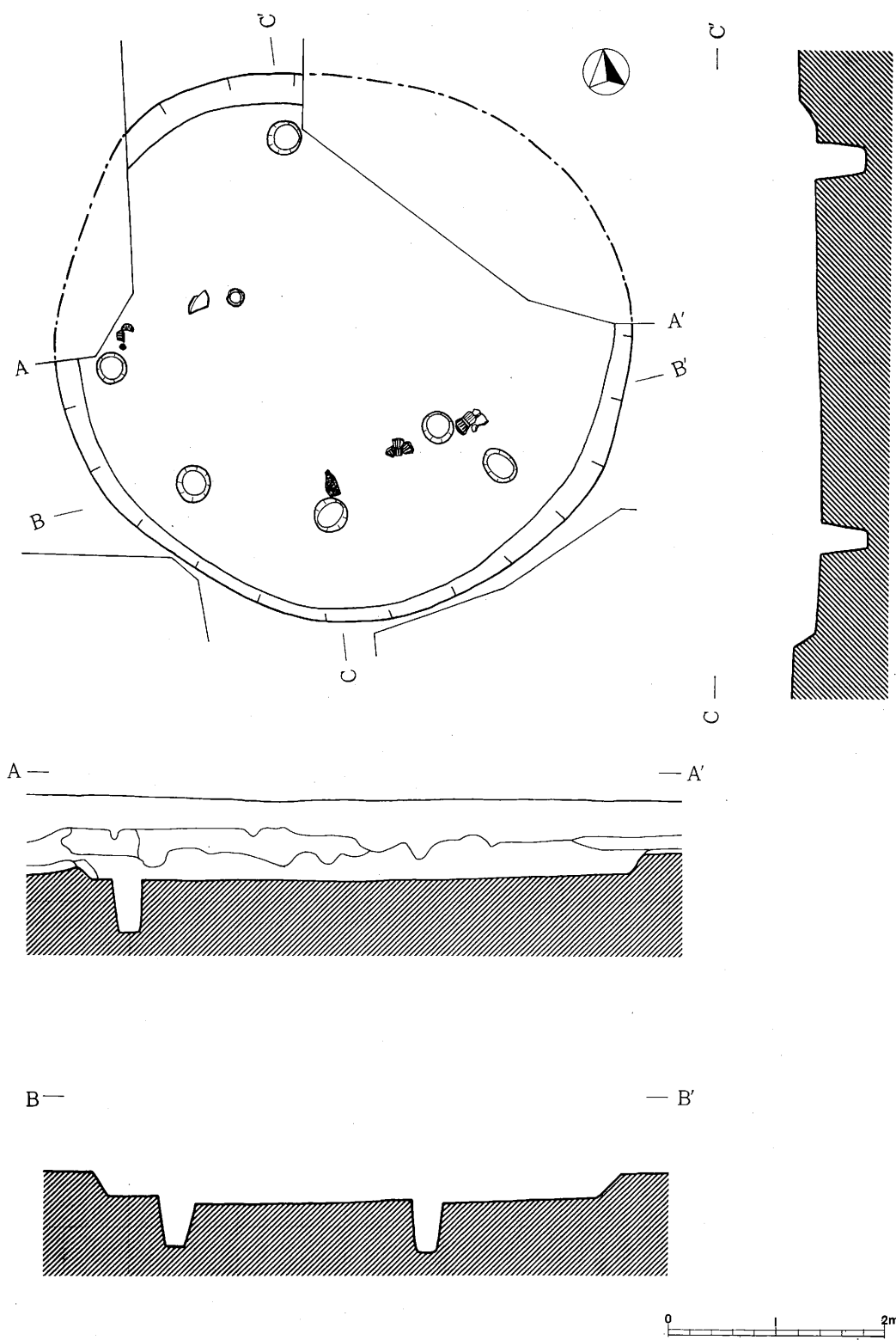
覆土から土器、石器が得られている。出土場所は住居内の南側と西側の2地点に集中している。南側から出土した1、2は床面より20cm前後浮いて出土し、西側の4、5は10cm前後浮いており、南側出土土器よりやや床に近い出土状態を示している。

1は、推定口径21cm、器高29.4cmの深鉢形土器である。平出3類A系の土器であるので、口縁部に山形小突起が付された器形と思われる。口辺部には並行沈線による区画とその内を横位の並行沈線文を施文する。この区画文下から胴下半部まで縦位に沈線文を施し、上半部に横位に並行沈線文3組6本をめぐらし、4分割するように()状の沈線で区画している。胎土に長石を多く含み、赤褐色を呈する焼きしまりの良い土器である。

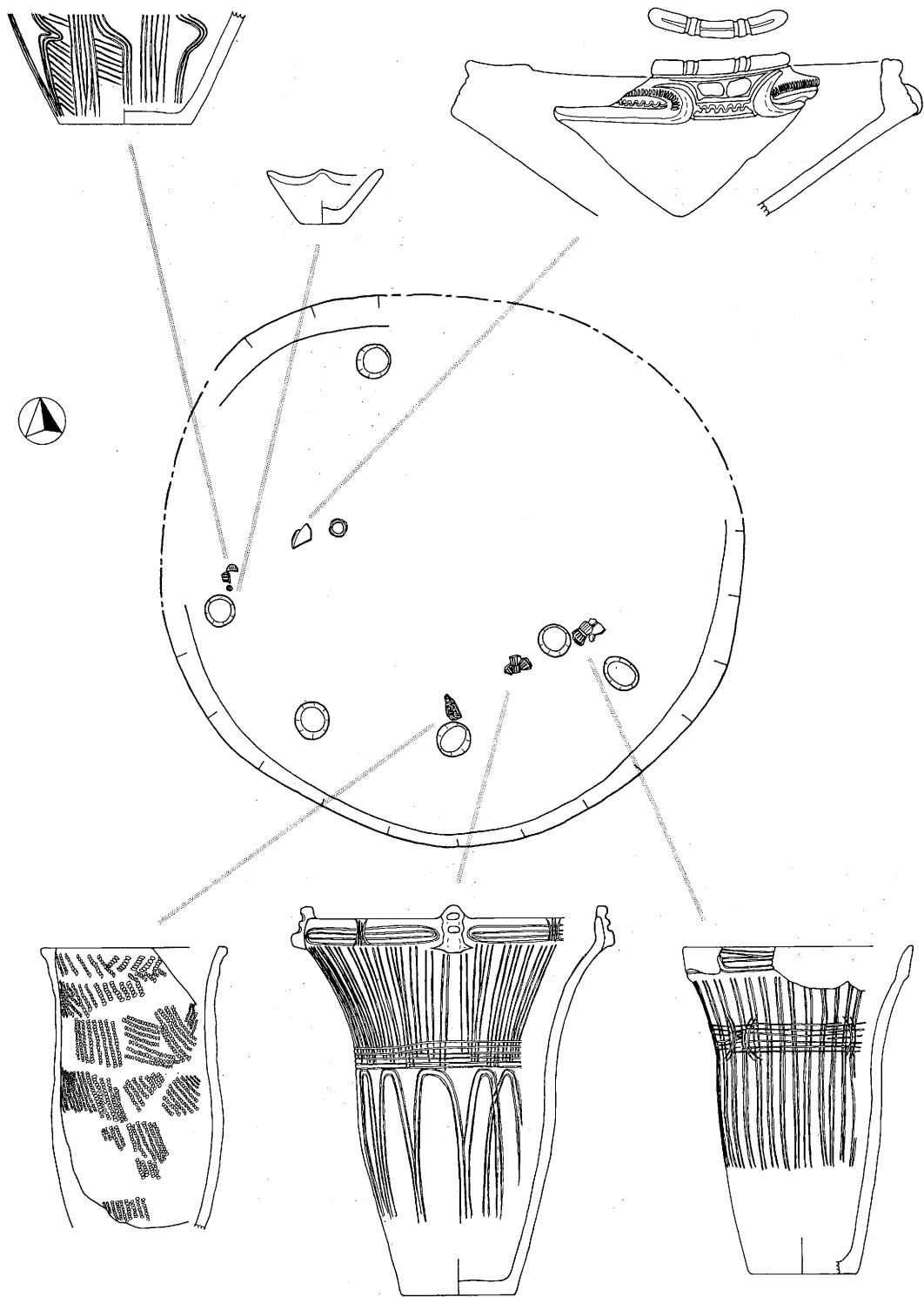
2は、1の脇から出土した平出3類A形の土器で、口径28.5cm、推定34cmの深鉢形土器である。口縁には小尖起を貼付し、それより頸部に垂下する隆帯には刻みをつけている。隆帯間には2単位の平行沈線による楕円状の区画文を配し、これより胴部上半には並行沈線文を縦位に施文し、その末端を数条の横位並行沈線がめぐっている。胴下半部には∩状の粗大化した文様が施されている。胎土に長石を含み、黄褐色を呈し、焼成は良い。

3は、胴下半部の破片で、底径11.6cm。縦位を基本とする並行沈線文を主体に、文様間を斜行する沈線で埋めている。底面には網代が残されている。長石、岩片を含み、黄褐色を呈し、焼成は良い。

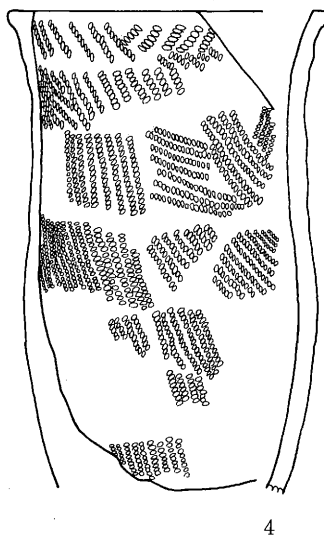
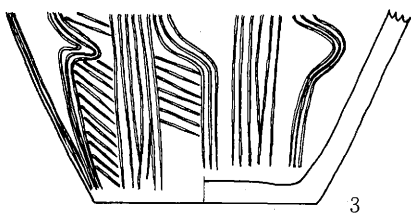
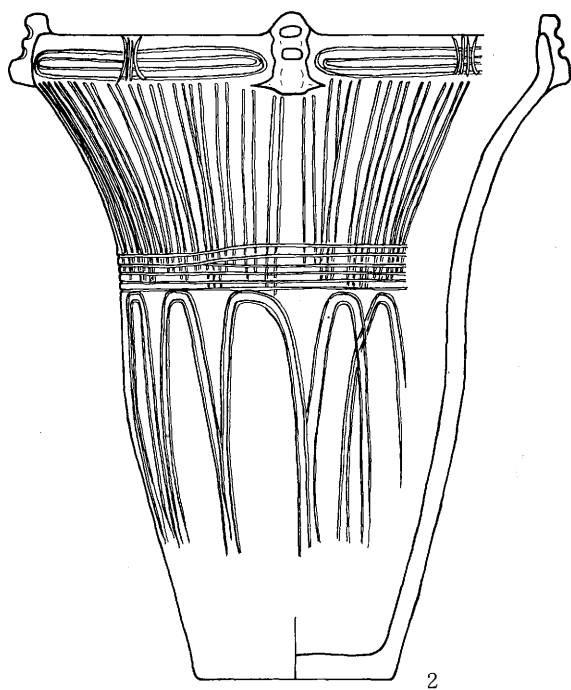
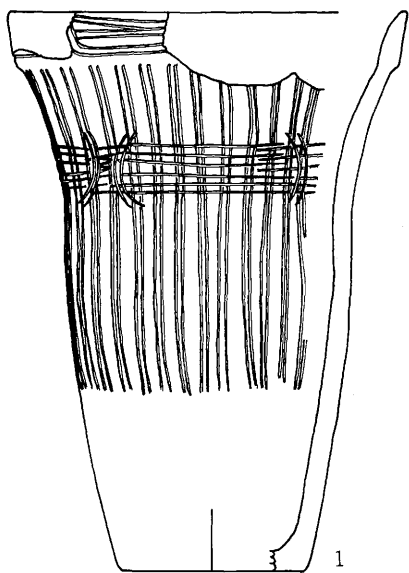
4は、口径17cm、現在高25.5cmの深鉢形土器で、全面にLRの縄文を施文している。長石を含み黄褐色を呈し、焼成はやや良。内面胴下半に煤の付着が認められる。



第4图 J-1号住居址平面图



第5图 J-1号住居址土器出土状态图



第6图 J-1号住居址出土土器(1)

5は、口径39.4cmを測る浅鉢形土器である。文様は口辺部に集約し、隆帯による楕円区画を基本に区画文内を楕円形文、交互刺突文によって充填している。口唇部には粘土帯を貼付し、立体感を表出している。石英、長石、黒雲母を含み、赤褐色を呈する。焼成は良い。

6は、器高2.5cmのミニチュア土器で、波状口縁を呈する。口唇部は面取りがなされ、しっかりした作りである。長石を含み焼成は良い。

7は、1の口縁に類似し、並行沈線文を施文している。8は、口辺部に刺突をもった口縁部破片。

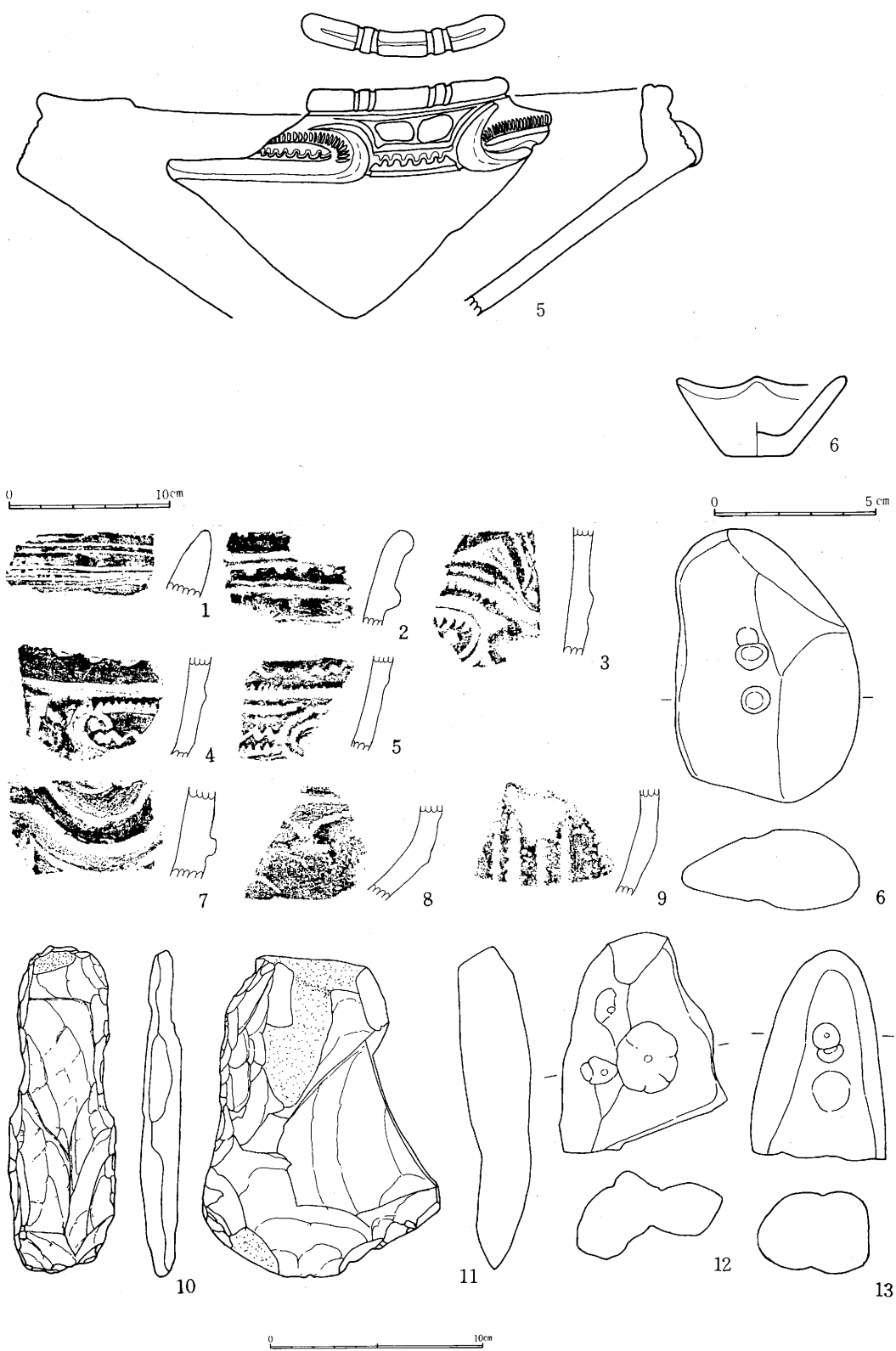
9～11は隆帯、刺突文を組み合わせたもの。

以上、住居址出土の土器群は、平出3類A系の良好なセット資料といえる。

(2) 遺構外出土遺物(第6図)

1は130mから出土した隆帯、押引文施文の土器片。2も130mから出土したもので、刺突文を施した浅鉢形。3は隆帯、沈線による渦巻文を有する土器片で、130mから出土。図示できる土器は、以上のように極めて少なく、他は小破片である。

遺構外から出土した石器は、打製石斧2、凹石2の計4点である。1は、130mの地点から出土した打製石斧で刃部の一部を欠くものの、完形品といってよい。長さ15.2cm、幅5cmで胴上半にゆるい抉りを入れ、その側縁は着柄のための磨耗が著しい。刃部の裏面は使用痕が観察できる。頁岩製、160g。2は140mから出土した大形粗雑な石斧で右縁部を欠損している。硬砂岩製、495gで、重量感があり、裏面全面に磨耕痕が観察できる。3は、130mから出土した凹石で、表裏面に磨耗による大きな凹みを有し、側面にも同様の凹みがある。中粒砂岩、255g。4は150mの位置から出土した凹石の半欠品。表裏に敲打による凹みがあり、明確な凹みとならずザラついた状態となっている箇所もある。細粒凝石岩340g。



第7图 J-1号住居址，遺構外出土遺物

第Ⅲ章 ま と め

平出遺跡は過去に於て何回かにわたって発掘調査がなされ縄文時代から平安時代にいたる大集落址であることが判明し、昭和27年には国史跡に指定された。指定範囲は東西1km、南北300～400mにわたる15haである。今回の発掘調査地区は、その北側、東側にあたり、付近は昭和54年、55年の両年度に遺構確認調査が実施されている。そこで従来の調査結果を参考にしながら今回調査地区の遺跡内における位置、検出遺構の意義を考えてみたい。

まず遺物の出土状態であるが、第1表に示したごとく総面積698m²の発掘にもかかわらず250片と極めて少ない状態であった。その出土地点は住居址覆土中からの出土を主体に、他に130m、150m、300m地点からわずかな数量出土したにすぎず、大部分の調査区では出土遺物は全く認められない。280m～349mの同じ畑地を調査した昭和54年調査でのE～K25～27グリットでも各グリット出土の遺物は皆無か5片内外で遺物の散布は極めて希薄であると報告されている。また、0～50m地点の隣接地を調査した昭和55年度調査のA～C7～11、GH1～5の各グリットではA9、10グリットで50片ほどの土器片を出土した以外はやはり遺物の出土は僅少であった。このような調査結果から、両年度の報告書では、調査地域は遺構の東限および北限を示し、集落のはずれであったとの推定がなされている。今回の調査でも一応この結果が裏付けられたことになった。

では、一軒だけ検出された縄文時代の住居址はどのような意義をもつのであろうか。平出遺跡における縄文時代の住居址の調査例は21例におよび、その分布は中央やや西寄りの現在史跡公園として整備が進められている地域周辺と中央東寄りにある共同墓地の西側の一帯とに中心をもっている。今回発見された住居址は後者の分布域に近い。ここの住居址はへ号(新道期)、ホ号(藤内期)、ト号(井戸尻Ⅲ期)、リ号(曾利Ⅰ期)で、中期中葉の時期が主体となっている。おそらく中期中葉の集落がこの場所を中心に展開し、今回発見の住居はその外縁部に構築されたものであったと推定される。出土した土器類は、いわゆる平出Ⅲ類A系統の土器を主体とするもので、一住居址単位のセットとして把えられた意義は大きい。特にこの種の土器は昭和20年代に調査された結果をもとに平出ⅢAとの名称が与えられ研究が進められているにもかかわらず、その研究の端緒を開いた平出遺跡出土土器にその良好な資料が少なかったが、今回良好な資料が得られたことにより、その資料を補強することとなった。

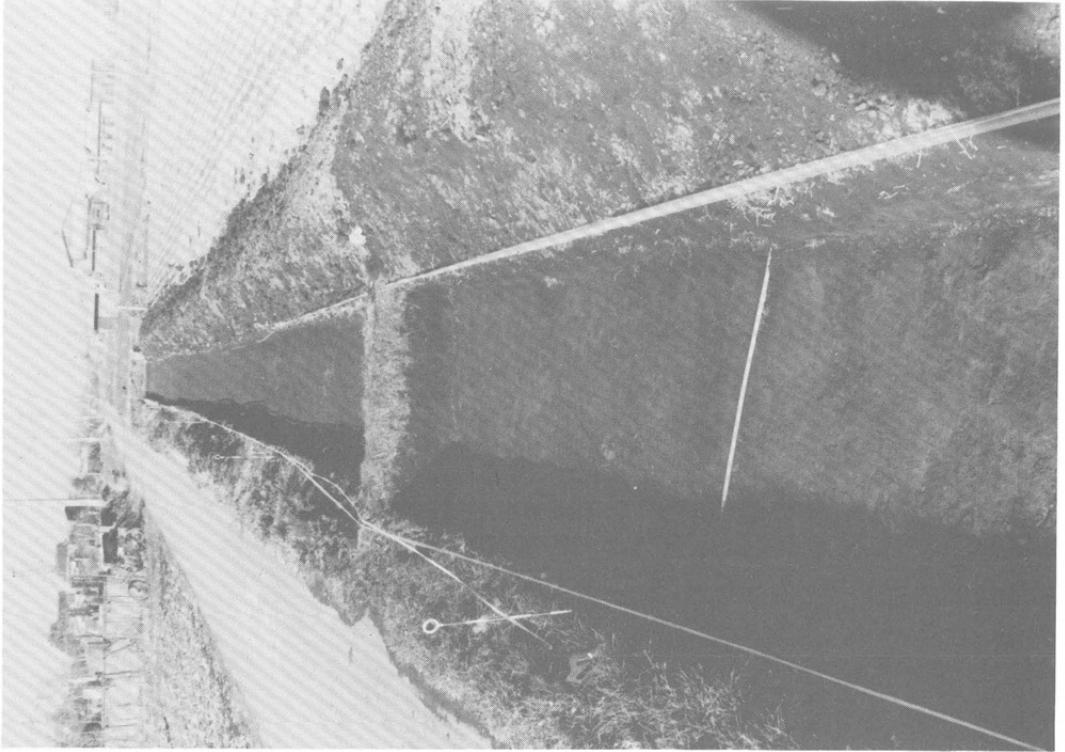
以上のように今回の調査地域は一部に居住域も及んでいるが、集落の外縁にあたり、集落の限界域であったことが判明した。



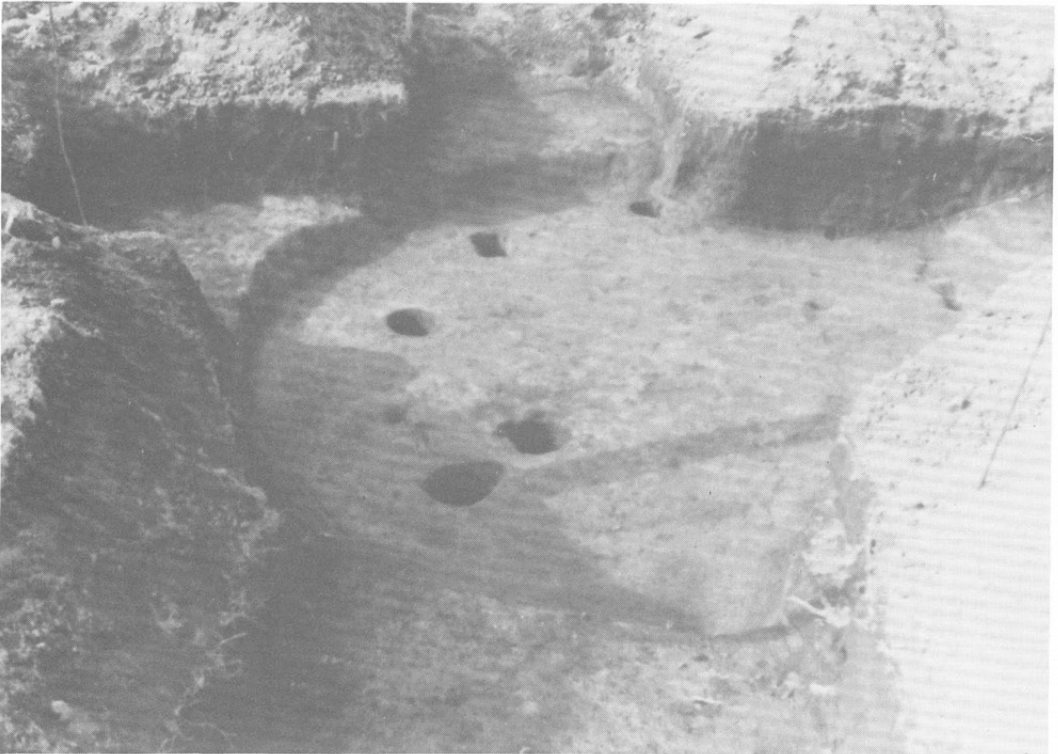
調査区全景（西より）



調査区全景（東より）



調査区全景 (南より)



J-1号住居址全景



J-1号住居址土器出土状态



J-1号住居址出土土器

史跡 平 出 遺 跡

昭和60年度県営かんがい排水事業中信平地区
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

昭和61年 3 月 20日 印刷

昭和61年 3 月 25日 発行

発行所 長野県塩尻市教育委員会

印刷所 (株) 高砂印刷所

